

《論 説》

ブラウロンのアルクテイア再考
—— アルテミスへの奉納行為を手掛かりに ——

小山田 真 帆

【要旨】

古典期アテナイにおいて、未婚の少女は様々な宗教的役目や儀礼に従事していた。本稿はそのなかでも、アッティカ地方のアルテミスの聖域ブラウロンで行われた「アルクテイア」に注目する。アルクテイアは一般的に女子の成熟の儀礼であったと考えられているが、文献資料の乏しさとそこに見られる相互に矛盾する記述から、儀礼の基本的な参加条件や機能について多くの議論が交わされてきた。本稿では、アルクテイアが少女の性的成熟を表す儀礼であったことを再確認すると同時に、後世の史料に基づいて付されてきた5～10歳という参加条件を支持しがたいものとして退ける。そして、アルクテイアは比較的富裕な家庭の少女が参加する儀礼であり、それによって少女たちは象徴的に結婚可能な状態になったことを示した。さらに、ブラウロンにおける女性による奉納行為とアルクテイアがどのような関係にあったかを考察し、ブラウロンで行われていた儀礼と奉納を含む宗教行為全体が、当時の女性らしい生き方のイメージを女性たち自身に内面化させる機能を持っていたと結論付ける。

はじめに

古代ギリシア史研究における女性への関心は、早くも18世紀の啓蒙思想のなかに認めることができるが、当時の研究目的は家父長的な近代市民社会の模範とするための「女性の地位」の規定であった¹⁾。本格的な女性史研究は1970年代の第一波フェミニズム運動の勃興とともに始まり、数多くのアプローチがなされてきた。それらの研究の成果として得られた、古代ギリシア世界は男性中心社会であり、あらゆる場面で女性は抑圧を受けていたという像は、既に多くの研究者に共有されていよう²⁾。

1980年代後半以降の女性史研究はさらなる転換を見せた。1986年の研究動向論文で桜井が指摘したように、古代ギリシア世界において「女性」というイメージを構築した当時の社会に注目した研究が数多く発表され、現在まで蓄積されてきている³⁾。しかしながら、女性の手による史料がほとんど残っていないという制約から、依然として男性側に視点を固定したものが多くあることも事実である。「女性」というイメージを構築した当時の社会のなかには当然女性たち自身も含まれ、彼女たち自身もこのイメージの構築に何らかの影響を及ぼしていたであろうことは無視できない。したがって、「女性」という概念構築の主体としての女

性たちに注目することも必要であろう。

本稿では、この研究課題に応えるべく、女性の生き方がいかなる方法で女性たち自身に認識されていたのかというプロセスを解明することを目標としたい。そのためのケース・スタディとして、「アルクテイア⁴⁾」という儀礼を検討する。アルクテイアは、アッティカ地方のブラウロンで行われた儀礼である。ブラウロンはアルテミスの聖地として名高く、古典期にはアテナイの国家祭儀であるブラウロニア祭が開催されていた⁵⁾。そのなかで開催されたこの儀礼は、多くの研究者によって女子の成熟を表す儀礼であったと考えられており、少女を大人の女性の範疇に迎え入れるための一種の教育であったともみなされている⁶⁾。したがって、この儀礼の分析により、アテナイの女性たちがいかにして「女性」としての生き方を学び、アテナイ的「女性」が再生産されていたのかを明らかにすることができるであろう。

また、アルクテイア研究のなかでこれまで付属的にしか言及されてこなかった、アルテミスへの奉納活動にも焦点を当てたい。アッティカ地方の女性たちは、出産の無事や子の健やかな成長を祈って、ブラウロンのアルテミスに奉納を行っていた。結婚前に行う儀礼と出産・育児に深く関わる奉納活動との関係を明らかにすることで、従来のアルクテイアの認識に新たな視座を提供できるのではないかと考えている。

ブラウロンはアテナイから東に約 35 キロメートルの海岸沿いに位置するアルテミスの聖域である。この地に祀られた女神はアルテミス・ブラウロニアと呼ばれ、アテナイのアクロポリスの一角にも神殿が設けられていた⁷⁾。ブラウロンは前 4 世紀に付近のエラシノス河の氾濫によって大きな被害を受けるが、以後復興作業が行われることはなかったと考えられている⁸⁾。伝アリストテレス『アテナイ人の国制』によれば、この地でブラウロニア祭という祭儀が開催されていた⁹⁾。これは「5 年目ごとの πεντετηρίς (4 年に一度の¹⁰⁾)」祭りであり、籤で選出されるヒエロポイオイという委員によって運営されていたことから、アテナイの国家祭儀的な性格を持つ重要な祭儀であったことが窺える。ブラウロニア祭の内容について詳しいことは分かっていないが、アルクテイアはこの祭儀において行われていたと考えられている¹¹⁾。

ブラウロニア祭及びアルクテイアの内容を記録した文献資料は少ない。その僅かな史料も主要な部分が後世のものであり、さらに相互に矛盾する記述が各所に見られる。このような状況から儀礼の全容を知ることは極めて困難であるが、各史料に共通する情報として以下のことが分かっている。アルクテイアは未婚の少女が参加する儀礼であったこと、参加する少女たちはアルクトイ ἄρκτοι すなわち「クマ」と呼ばれたこと、アルクトイはクロコトイ κροκοτοί と呼ばれるサフラン色の衣装を身に着け、アルテミスのために儀礼を催したということである。

アルクテイアに言及した古典期の文献資料は、アリストファネス『リュシストラテ』641-47 行 (Ar. *Lys.* 641-47) のコロスの台詞がほとんど唯一のものである。古代ギリシアの少女

の宗教儀礼に言及する際、必ずと言ってよいほど引き合いに出されるこの詩句は、コロスを構成する女性たちが子供の頃からどのような宗教的役目を果たしてきたかを描写している。

7歳になって私はすぐにアレフォロスを務め、
次に10歳のときに女神様のためのアレトリスに、
それから次にブラウロニア祭でサフラン色の衣装を纏ってアルクトスに、
そして美しい娘になったとき、干し無花果の首飾りをしてカネフォロスを務めた¹²⁾。

ブラウロニア祭のアルクトスに言及する645行に付された古註は、同時代史料ではないながらもアルクテシアの内容を知る上で重要なものである。この箇所古註にはライデン写本（以下、古註Lと略記）とラヴェンナ写本（以下、古註Rと略記）が存在し、多少の差異は見られるものの、どちらもこの儀礼の起源神話を伝えている。そこからは、アルテミスのクマが人間に殺されて女神の怒りを招き、その怒りを宥めるために儀礼が創設された、という内容を読み取ることができる。これ以外には『スタ』やハルポクラティオン、ヘシキオスの該当項目も関連史料として挙げられる¹³⁾。ブラウロニア祭及びアルクテシア研究は主に以上の文献資料を用いて行われており、本稿でもこれらの分析を中心として議論を進めたい。

文献資料だけでなく、考古資料も重要な手がかりとして用いられている。1948年からブラウロンの遺跡の発掘が開始され、聖域の空間的な情報や多数の出土品は、上記の文献資料の乏しさを大いに補うこととなった¹⁴⁾。とりわけ注目に値するのは、聖域から発見された陶片群である。これらの陶器は、カイルによって注釈を施されて、「クラテリスコイ」と名付けられ、少女たちの儀礼と思われる描写からアルクテシア研究の重要な資料とされている¹⁵⁾。

第1章 先行研究の整理と問題の所在

ブラウロニア祭及びアルクテシアに関する初期の研究は、ジャンメールとブレリチによるものである¹⁶⁾。先に触れたようにアルクテシアに関する史料群には相互に矛盾する記述がいくつか見られるが、なかでもとりわけ議論的となったのが年齢条件についての記述であり、両者の考察はその矛盾を解消する試みとして位置付けることができる。

アリストファネス『リュシストラテ』のテキストからはアルクトスを務めたのが11歳以上の少女と解釈できるが、古註Lや『スタ』(s. v. Ἄρκτος ἢ Βραυρωνίως¹⁷⁾、以下この項目をSと略記)には5歳から10歳と明記されている。ジャンメールは時代が下るとアルクテシア参加者の年齢条件が低くなり、本来持っていた成熟の儀礼という機能を失って形骸化したとする主張を展開した¹⁸⁾。ブレリチも、前5世紀以降、儀礼に変化が生じたことを想定してこの詩句を説明しようと試みている¹⁹⁾。

1948年からの発掘調査により、考古学の領域にも研究が拡大したことは既に述べた。特

に出土した陶片群を元に、議論は儀礼の詳細な内容にまで広がった。その主な論点は参加者の年齢条件、参加者の規模と身分的特徴、儀礼の意義と機能という三点に集中していると言える。以下では、これらの論点に沿って儀礼の内容に関する研究史をまとめ、問題の所在を明らかにしたい。

第1節 アルクテシアに関する先行研究

アルクテシアに関する研究は、上記の三つの論点を中心となっている。ただ、それぞれが独立して議論されているわけではなく、年齢条件及び規模と身分的特徴に関する考察をベースに、儀礼の意義と機能を論じるという形が一般的である。

参加者の年齢条件に関する議論はジャンメール以来多くの研究者によってなされてきたが、現在通説となっているのは古註 L、及び S の記述に信を置く、5 歳から 10 歳の少女とする説である²⁰⁾。またハルボクラティオン (Harp. s. v. ΔΕΚΑΤΕΥΕΙΝ) とヘシュキオス (Hesychius s. v. Δεκατεύειν) からは、リュシアスが弁論中で δεκατεύσαι と ἀρκτηεύσαι の 2 語を同義語として使用しており、これはアルクトスを演じるのが 10 歳の子供であったためだという説明が読み取れる。以上の文献資料の記述を踏まえると 5 歳から 10 歳という年齢条件は疑いないものであるように思えるが、ほぼ唯一の同時代史料である Ar. Lys. 645 にはこれと矛盾するような記述がある。641 行から始まる一節を見ると、7 歳のときにアレフォロスになり、「次に εἶτ' (εἶτα)」10 歳のときにアレトリスに、さらに「それから次に κᾶτ' (καὶ εἶτα)」という語を重ねて、アルクトスになったと述べられている。この表現からはアルクトスを務めたのが少なくとも 11 歳以上であるように解釈できる（「次に」を重ねるごとに年齢が上がっていく）。またクラテリスコイの図像に 10 歳を上回る年齢の少女が描かれていることも、5 歳から 10 歳という記述と矛盾する²¹⁾。この矛盾の解消がアルクテシア研究の大きな焦点となった。

この議論のなかで最も興味深い説を唱えたのがスルヴィヌー＝インウッドである。彼女は Ar. Lys. 644-45 に校訂を加え、以下のような読みを提案した（下線引用者）。

εἶτ' ἄλετρις ἢ δεκέτις οὖσα τάρχηγέτι
καταχέουσα τὸν κροκωτὸν ἄρκτος ἢ Βραυρωνίους
 次にアレトリスになった。10 歳のときには女神様のために
 ブラウロニア祭でクロコトスを投げ落とすアルクトスになった。

彼女はこの校訂により、アルクトスを 10 歳で務めたと読むとともに、クロコトスを「着る」ではなく「投げ落とす」、すなわち「脱ぐ」と読むことを提案した²²⁾。645 行の冒頭 καταχέουσα の校訂前の表記である κᾶτ' ἔχουσα は、中世の多くの写本において κατέχουσα となっていたのを韻律上不自然であるとして訂正したものであったが、彼女の提案した καταχέουσα は古註

Rのみではあるものの、写本によって伝えられている表記である²³⁾。彼女の校訂、及びアルクテシアにおいてクロコトスを脱いだとする仮説は多くの研究者に受け入れられ、その後スティントンの更なる校訂を経て²⁴⁾、καὶ χέουσα という読みで多くのテキストに収録されている²⁵⁾。

スルヴィヌー＝インウッドの校訂と仮説を受け入れるか否かは別として、古註LとSの情報は信用できるものとして多くの研究者に支持されてきた²⁶⁾。しかしこの説に対して、参加者の年齢条件はより年長であるとする意見もある。パールマンはスルヴィヌー＝インウッドの校訂の不自然さを指摘したうえで、10歳から14、5歳の娘が参加していたであろうと主張する。彼女はクラテリスコイに裸の少女と着衣の少女が描かれている点に注目し、プラトンの一節を引き合いに出して、13歳までの少女が裸、13歳以上が着衣で参加したと推測した²⁷⁾。またマリナトスも上記の史料の矛盾を、後代の史料である古註LとSの誤りであるとし、女性の一生において「思春期」にあたる11、12歳から15歳までの少女が参加していたと主張している²⁸⁾。

年齢条件の他に、どのくらいの数のどのような少女たちが儀礼に参加していたかという点にも研究者たちの関心が向けられた。まず多くの研究者が賛同するのが、アルクテシアは選ばれた少数者による儀礼であったという説であり、これも古註Lの記述を根拠とする²⁹⁾。反対に古註Rには「すべての乙女」が参加するという記述があるが、ブラウロンの空間的なキャパシティを考えると、アテナイ人の同一年齢層の娘全員が入るのは不可能であることから、人数には制限があったのではないかとされている³⁰⁾。

これに対して、儀礼は市民の娘全員が参加するものであったとする説も唱えられている。サイモンはペルシア戦争を契機にアテナイにおけるアルテミスの地位が高まり、アテナイ人全員が娘を儀礼に参加させるようになったと主張する³¹⁾。パールマンも、選ばれた乙女が参加したとする古註Lの記述はブラウロンの儀礼を反映したものではないとして拒絶し、全員参加であった可能性を示唆している³²⁾。

以上の年齢条件と規模に関する考察をベースとして、アルクテシアの意義とは何だったのか、アテナイ社会でどのような機能を果たしていたのかという問いが議論の核を成している。最初に述べた通り、アルクテシアは結婚や性的成熟との関連が深い儀礼であるとする研究者が多い。思春期の少女が結婚の準備を整え、妻あるいは母という新しい社会的身分に加入するためのいわゆる「通過儀礼」であるという考えが通説になっている。

Ar. Lys. 645の校訂に際しクロコトスを「脱ぐ」という読みを提案したスルヴィヌー＝インウッドは、アルクテシアと結婚の結びつきを明確に主張している。彼女によれば、古代ギリシア世界で女性、とりわけ処女 παρθένοι は動物的な性質を持ち、馴致されねばならない存在とみなされていた。アルクテシアは彼女たちを「手なずける」儀礼であり、この儀礼を終えることで少女たちは象徴的に結婚が可能な状態になる。クマという動物はアルテミスと関わりが深いというだけでなく、その特徴からもこの儀礼にふさわしいとスルヴィヌー＝イン

ウッドは主張する。すなわち、クマは飼い馴らすことが出来る動物であり、人間に従い、人間社会のなかで生きることを学ぶ動物である。また、雌クマは仔を守る母性に溢れた動物とみなされている。クマはこのような肯定的なイメージだけでなく、古代ギリシア人には好色な動物としても知られていた。制御できない性的欲求という野生的な部分も持ち合わせた動物だったのである。アルクテアで少女たちはクマに扮し、また最後にそのイメージを脱ぎ捨てることにより、アテナイ社会への馴化と良き母親という好ましいイメージを得ると同時に、若い娘特有の野生性と過度の性的欲求を排除したという³³⁾。

パールマンは、スルヴィヌー＝インウッドの校訂を批判しながらも³⁴⁾、クマが古代において乙女と母という二重のイメージを持つものであったことを明らかにし、アルクテアが少女(乙女)から母への身分移行を表現する儀礼であったという同様の主張を展開する³⁵⁾。さらに *Ar. Lys.* 641-47 の 4 つの宗教的役目に注目して、アッティカには女子の年齢階梯制が存在し、この詩句は 7 歳から 14, 5 歳の年齢層に属する少女が行ったいくつかの儀礼を概観したものであるとした。そして男子の教育に関する古代の記述からの類推から、これらの少女の宗教的役目は男子の公教育に相当するものではないか、と結論付ける³⁶⁾。マリナトスも女子の年齢階梯制が存在したことを主張し、カラムの「乙女のコロス³⁷⁾」に関する考察を援用して、アルクテアなどの移行の儀礼が、大人の女性に必要な要素を学ぶ教育の機能を有していたとする³⁸⁾。また桜井万里子は少女が年齢に応じて果たした種々の宗教的役目が、「市民共同体の成員として成長を遂げるための一種の通過儀礼に相当」していたとしている。しかしあくまで女性に市民権は与えられず、彼女たちに求められたのは妻や母として市民共同体の維持・繁栄に協力することであったことを強調する³⁹⁾。

その他にも多くの研究者がアルクテアを成熟の儀礼や通過儀礼であると主張、あるいは前提とするものの、そうした見方に対する批判も投げかけられている。ファラオネはこれらの見方を全面的に否定し、ブラウロンの少女の儀礼を、ペロポネソスなど他地域の儀礼や男子の儀礼と単純に比較する手法を批判した。アルテミス・ブラウロニアは「通過儀礼」と関わりの深い狩猟の女神ではなく、災いや疫病をもたらしたりわけ出産時に女性に死を与える怒れる女神であり、この儀礼は女神を宥め、国家安寧及び女性への庇護を祈願するものであったとする⁴⁰⁾。また、ラーソンも 5 歳から 10 歳という年齢の少女が参加する儀礼は結婚と結び付け難いとして、子供の無事な成長を祈る儀礼であったのではないかと考察している⁴¹⁾。このようにアルクテアが成熟の儀礼であったとする説は概ね認められているものの、揺らぎのない説になったとはまだ言い難い状況にある。

第 2 節 問題の所在

以上で整理した先行研究から、問題の所在を確認したい。まずラーソンが指摘しているように、5 歳から 10 歳の年齢制限が設けられた儀礼が結婚と関わりの深い儀礼として想定されている点は、筆者にも不自然に感じられる。古典期アテナイにおける女性の結婚年齢は 14,

5歳程度であった⁴²⁾。この通説における不整合を解消するため、儀礼の内容を再検討する必要があるだろう。この点は次章で詳しく考察したい。

また、スルヴィヌー=インウッドに代表されるように、先行研究では外部（社会）から認識された儀礼の意義や機能に注目する傾向が強く、儀礼の参加者である女性たちに対してどのような機能を果たしていたか、という問題には触れられていない。さらに、先行研究の多くにおいて、Ar. Lys. 641-47に描かれた4つの役目が「少女の宗教儀礼」という体系的な枠組として捉えられている点も今一度検討し直す必要がある。これらの役目にはもちろん未婚の少女が関わるといふ共通点はあるが、これらをまとめて描写している同時代史料は他に確認されておらず、古典期アテナイにおいてこのような枠組が一般的に意識されていたかは定かではない。女性に関する史料が乏しいのはやむを得ないことではあるが、アリストファネスの描写だけを根拠にしてこれらをひとまとめに論じてしまうのは、いささか性急な議論であるかもしれない⁴³⁾。

以上を踏まえて、女性たちにとっての儀礼の機能、その機能として女性が生き方のイメージを獲得していったプロセスを明らかにするためには、アルテミス・ブラウロニアへの奉納との関係を探ることが有効であると考えられる。その存在に確証を与え得ない「少女の宗教儀礼」という枠組ではなく、同じ土地で、同じアルテミス・ブラウロニアという女神に対して行われていた宗教的行為との関係にこそ注目すべきであろう。さらに、ブラウロンにおけるアルテミスへの奉納は女性たちによって行われていた。したがって、奉納の実態に迫ることで、アルテミスに対する宗教的行為の主体としての女性たちを見ることができると考えられる。アルクテアと奉納の関係については第3章で論じ、女性たちが自身の生き方のイメージを獲得していったプロセスを明らかにしていきたい。

第2章 儀礼の検討と考察

前章で述べた通り、アルクテア研究における通説のなかでは、年齢条件と儀礼の意義を結び付け難い点がある。本章では5歳から10歳という年齢条件を見直しつつ、アルクテアがやはり結婚や性的成熟と結びつく儀礼であったことを改めて確認することで、通説に修正を加えたい。また、先行研究のなかで主要な論点を成している参加者の規模についても筆者の見解を述べる。

第1節 参加者の年齢条件の検討

アルクテアへの参加には、5歳から10歳という年齢制限が設けられていたとする考えが通説となっているが、既に述べた通り、この説にはパールマンやマリナトスによって異議が唱えられており、筆者もこれに対しては疑問を抱いている。以下では史料の分析を通して、この年齢条件が支持し難いものであることを示す。

まず関係史料が示す年齢条件の情報を整理する。古註 L (Ar. *Lys.* 645 の古註ラヴェンナ写本) と S (Suda s. v. Ἀρκτος ἢ Βραυρωνίσις) には「5 歳未満でなく 10 歳を超えない」と明記されている。これに対して Ar. *Lys.* 645 とブラウロンその他聖域から出土したクラテリスコイの図像には 11 歳以上の少女の存在を認めることができる。前者は後世の史料であるのに対し、後者はほぼ同時代のものであり、より信頼に足る情報であるといえるだろう。

それでは、なぜ古註 L と S の 2 つの史料に 5 歳から 10 歳とする記述が存在するのだろうか。マリナトスは後世の史料である古註 L と S が何らかの誤りを犯しているとしながらも、具体的な内容には言及していないが⁴⁴⁾、通説の年齢設定を批判するためにはその検証も必要であろう。2 つの史料に見られる年齢条件の誤りが引き起こされた原因としては、古典期から遠く隔たった時代の古註釈者が犯したであろう、二重の誤解を推定することができる。一つはブラウロニア祭の開催頻度を「4 年に一度」でなく「5 年に一度」と取ったという誤解、もう一つは参加者の年齢上限を 10 歳と解釈したという誤解である。以下ではこの 2 点について詳しく論じることとする。

「はじめに」で触れたように、古典期の年の数え方は現代と異なっており、祭儀の開催頻度は開催年も含めて表現されていた⁴⁵⁾。すなわち直訳すると「5 年に一度」となる πεντετηρίς という語は、「4 年に一度」という意味で用いられていた。しかし、具体的にどの時期かは判然としないが、ある頃から数え方が変化したと想定することはできまいか。古註 L や S、あるいはそれらが依拠した元の史料の註釈者ないし編纂者は、πεντετηρίς という語を古典期の「4 年に一度」という意味ではなく、その時代の習慣に従って「5 年に一度」だと誤って理解したのではないだろうか。実際に『スタ』のオリュンピア祭の項目とブラウロニア祭に言及した項目を比較してみると、それぞれ異なる表現がなされていることがわかる。

Suda s. v. Βραυρών⁴⁶⁾

アッティカの土地。ここではディオニュシア祭が開かれ、酔った男たちが娼婦を引っ掴んでいた。またアリストファネスは、「ああご主人、彼女はなんて素晴らしいテン・プロクトペンテテリダ τὴν πρωκτοπεντετηρίδα⁴⁷⁾ を持っているのだろう」[と述べている]。これはディオニュシアの祭礼が 5 年に一度 πενταετηροῦς 行われたためであると言われている。

Suda s. v. Ὀλυμπίας

4 年に一度の τετραετηρικός 競技祭。オリュンピア、イストミア、ネメア、ピュティアの 4 つの競技祭がある。……

既に確認したようにブラウロニア祭は 4 年に一度開催された祭儀であり、またオリュンピア祭も同じ頻度で開催されていたことはよく知られていることである。『スタ』においてブ

ラウロニア祭は「5」という数字で表される祭儀であったが、それに対してオリュンピア祭は「4」という数字で表されていた。両者の違いはどのように説明されるべきであろうか。

オリュンピア祭は言うまでもなく近代オリンピックのモデルであり、古代のオリュンピア祭もパンヘレニックな競技祭として後4世紀末まで行われていた。その後も、少なくとも知識人の間では、オリュンピア祭に関してある程度具体的な情報が保持されていた可能性は高い⁴⁸⁾。対してブラウロニア祭は、前300年頃を境に、同時代的にその名に言及した例は現れていないという⁴⁹⁾。アテナイという一ポリスでのみ開催されていたこの祭儀は、オリュンピア祭に比べるとさほど知れ渡っておらず、古典期以降、あるいは多くの古註や『スダ』が編纂された中世にはほとんどその実像が伝わっていなかったのではないだろうか。つまり、古註釈者や辞書編纂者らは、オリュンピア祭は「4年に一度」だと知っていたが、ブラウロニア祭については知らず、古代の文献の記述をそのまま読みしかなかった。そして彼らの知るギリシア語に当てはめてブラウロニア祭に関する記述を読んだ結果、πεντετηρίςを「5年に一度」と解釈してしまったのである。

次に、Hesychius s. v. δεκατεύειν の記述に注目したい。「10歳くらいの乙女たちがそれ〔アルクテシア〕を行っていたからである」とある。「行う」は原文では ἐπρασσον (πράσσω) だが、これは「達成する、完遂する」という意味も持つ動詞である。ヘシュキオス自身がどちらの意味を持たせていたかは不明だが、この記述を読んだ後世の古註釈者・辞書編纂者は後者の意味で取ったのではないか。もちろんヘシュキオスそのものを参照したわけではなかったとしても、同様の表現を用いた史料を参照した可能性は大いにある。そこで、「10歳くらいの乙女がアルクテシアを完遂した」、つまり10歳が年齢上限であったと彼らは理解した。10歳が年齢の上限となると、どの年に生まれた娘でも平等に「5年に一度」の祭儀に参加する機会を得られるよう年齢幅を5年と推定し、機械的に5歳から10歳と記述した可能性は十分に考え得る⁵⁰⁾。古註LとSの事実と異なる記述は、このような二重の誤解によって生み出されたと推測できるのである。以上の考察はあくまで推論にすぎないが、同じ開催頻度であったはずのブラウロニア祭とオリュンピア祭が、『スダ』の中で異なる数字で表されているという矛盾に照らせば、一定の説得力を持つのではないかと筆者は考える。

本節の考察より、参加者の年齢条件を5歳から10歳とする古註LとSの記述にあえて信を置く必要はないと思われる。これを踏まえて、次節ではこの儀礼が結婚や性的成熟と関わりの深い儀礼であったことを再確認したい。

第2節 儀礼の意義の考察

同時代史料からは、参加者が幼い少女ではなく、ある程度性的成熟を迎えた娘であったことが推測できる。アルクトイが儀礼の際身に着けたとされるクロコトイ（サフラン色の衣装）は、古典期アテナイにおいて女性の性的魅力を表現する衣服であるとみなされていた。アリストファネス『リュシストラテ』は、戦争を続ける男性たちに女性たちがセックス・ス

トライキという形で抵抗するという内容であるが、重要史料である 645 行以外にもサフラン色の衣という言葉が現れる。作戦の考案者である主人公リュシストラテに対し、仲間の女性カロニケが問いかける。「女の身で γυναικες, どんな、気のきいた目新しいことがやれます？ わたしたちは、家にべったり腰を据えて、身をやつしサフラン色の着物にお化粧、下着は帯なし、履物は平底という種族なんですよ」。リュシストラテはこう答える。「それこそがギリシア救済にと、わたしが特むものなのです。サフラン色の着物、香水、平底の上靴、紅、そして透けた下着⁵¹⁾」。また別の箇所では、リュシストラテとカロニケがサフラン色の衣を着て化粧をした自分たちに夫が欲情するようにと願う⁵²⁾。これらの場面から、サフラン色の衣が成熟した女性のとりわけ性的な魅力を示すものであったことがわかる。したがって、儀礼の際にクロトスを着るという行為は参加者の性的成熟を示すものであった⁵³⁾。

またヘロドトスには、ブラウロンでアルテミスの祭礼を営んでいた女性たちをペラスゴイ人が誘拐し、妾としたとする記述がある⁵⁴⁾。前述のカロニケの台詞と同様、ここでも誘拐された女性たちを表す語として、ときに妻を意味する γυναικας が用いられている。残念ながらここでは「祭礼」の内容について詳しく語られてはいないが、誘拐された女性たちがアルクトイであったならば、結婚適齢を大きく下回る 5 歳から 10 歳の少女にこの語を用いるのは明らかに不自然であろう⁵⁵⁾。

ブラウロンの地に所縁があるとされるイフィゲネイアの伝承も、間接的にこの説を補強している⁵⁶⁾。彼女は祖国を救うためアルテミスへの犠牲に捧げられることになり⁵⁷⁾、アキレウスとの縁談を口実に父の下に呼び寄せられる⁵⁸⁾。アイスキュロスの作品のなかで、彼女は犠牲の祭壇でサフラン色の衣を纏った姿で表現されている⁵⁹⁾。その後アルテミスに命を救われた彼女は、ブラウロンで最初の女神官を務めた⁶⁰⁾。この逸話は悲劇作家たちによって記されているものであり、古典期においてもよく知られていたと考えられる。したがって、アルクトイと非常に多くの共通点を持つこの女性は、古典期においてアルクトイの原型とみなされていたと推測できる⁶¹⁾。そしてイフィゲネイアは、アキレウスとの縁談が示唆する通り、既に成熟を迎えた結婚可能な女性であった。

以上の史料から、アルクティアは結婚や性的成熟と関わりの深い儀礼であったことが確認できる。古註 L と S の記述を拒絶するパールマンとマリナトスは、それぞれ明確な年齢条件を提示しているが、ここでは具体的な年齢を示すことは避けたい。本章で筆者が主張するのは、あくまで「5 歳から 10 歳」という古註 L 及び S の記述が支持しがたいものであり、より結婚や性的成熟と関わる儀礼であったということのみである。例えば、初潮などの身体的成熟の徴が参加条件の一つの指標になったであろうことは推測できるものの、パールマンらが主張するような女子の年齢階梯制の存在を証明できない以上は、何歳から何歳までという明確な年齢条件が付されていたと安易に想定することは避けられるべきであろう。Ar. Lys. 641-47 の詩句についても、あくまで一人（あるいはごく少数）のアテナイ女性のモデル・ケースとして言及されているに過ぎず、必ず 4 つの宗教儀礼すべてが、順番通りに遂行されてい

たとする根拠はないと筆者は考える⁶²⁾。

第3節 参加者の規模と身分的特徴の検討

続いては参加者の規模について筆者の見解を述べる。どのくらいの数の少女が参加していたのかという点については、前章で述べたように、聖域の空間的キャパシティが検討されてきた。ブラウロンの聖域及び神殿にアテナイ人の娘全員が入ることは無理があったであろうが、アッティカ地方には他にもアルテミスの聖域がいくつか存在した。ムニュキアやハライといったそれらの聖域からは、ブラウロンと同様、クラテリスコイの破片が出土している⁶³⁾。また、古註Lには「ブラウロンのアルテミスとムニュキアのアルテミスのために」という記述があり、ブラウロン以外のアルテミスの聖域でも同様の儀礼が行われていた可能性が考えられる⁶⁴⁾。したがって、聖域のキャパシティはあまり問題ではないと言える。

先行研究のなかではしばしば、参加者が少数の上流家庭の少女に限定されたという前提が共有されているが⁶⁵⁾、今一度史料の記述に立ち返って検討してみる必要があるだろう。参加者が上流家庭（貴族的血統に連なる一族）出身であったとする根拠は、史料のなかには見受けられない。これはおそらく「少女の宗教儀礼」の他の役目からの類推であろうと考えられる⁶⁶⁾。また、「選ばれた」とする説は前章でも触れた通り古註Lの記述が根拠になっているが、該当箇所の“ἐπιλεγόμεναι παρθένοι”については「選ばれる乙女」と取る説と、ἄρκτοιなどの語を補って「アルクトイと呼ばれる乙女」と取る説がある⁶⁷⁾。したがって、この記述をそのまま「選ばれた少数者」説を示す証拠とすることは難しい。

しかしながら、「選ばれた少数者」説の根拠が弱いからといって、単純に市民の娘全員が参加したとすることもできない。古註Rには全ての乙女が結婚前に儀礼に参加することを投票によって決定した、という記述が見られ、「投票によって決定」という言葉からは強い拘束力が想起される。しかし、この史料自体は儀礼の起源神話を伝えるものであり、実際にアテナイでそのような決議がなされたとするには説得力に欠ける。このように文献資料のみによって参加者の規模を推測することは困難であるため、儀礼が行われた当時の状況から考察を加えてみよう。

アルクティアの様子を今一度思い起こしてみると、この儀礼への参加にはかなりの費用を要したであろうことが推測できる。儀礼の際少女が身につけるクロコトスは高価な衣類であったし⁶⁸⁾、アテナイから開催地のブラウロン（またはその他のアルテミスの聖域）までの旅費や滞在費⁶⁹⁾も必要になることを考えると、それ相応の費用を賄うことのできる家庭の女性しか参加できなかったはずである。したがって、上流家庭出身の市民の娘から選出されたと史料から断定することは難しいが、参加費用の面から考察すると、同一年齢層の女子全員が参加していたということも考えにくい。家柄による参加者の選別は無かったのかもしれないが、この儀礼に名乗りを上げることができたのは、娘をブラウロンまで送り出し、アルクトスの役目を立派に務めさせることのできる比較的富裕な家庭だけだったのであろう。

第3章 儀礼と奉納の関係、及び儀礼の機能

前章で確認したように、アルクテイアは結婚適齢期にさしかかった少女を大人の女性の範疇に迎え入れる儀礼であった。したがって、儀礼に参加する少女たちには「女性」としてこれからどのような人生を送るべきなのか、その具体的なイメージ形成が必要であったと考えられる。本稿ではそのように女性の「女性」としての生き方を規定したものとして、アルテミス・ブラウロニアへの奉納を位置付けたい。

「はじめに」で触れたように、アルクテイア研究のなかでアルテミスへの奉納は大きく取り上げられてこなかった。また、別の女神に対して行われる他の「少女の宗教儀礼」とひとまとめに論じられ、儀礼の本来の姿が見えにくくなっていることも既に述べた通りである。本章では、アルテミス・ブラウロニアという同じ神格に対する宗教的行為としての両者の関係を探ることで、古典期アテナイの女性たちが「女性」としての生き方のイメージを獲得したプロセスに迫りたい。女性の生き方が認識されたプロセスを辿ることは、文化的所産たる「女性」の概念が、女性側からどのように構築されていったのかを知ることにも繋がるであろう。まずはブラウロンで行われたアルテミスへの奉納がどのようなものであったかを概観し、それを踏まえて考察を行う。

第1節 アルテミス・ブラウロニアへの奉納⁷⁰⁾

19世紀の前半、アルテミス・ブラウロニアの奉納目録がアテナイのアクロポリスのブラウロニオンから初めて発見された。以後、その周辺から多くの断片が見つかり、現在では16例が『ギリシア碑文集成』に収録されている⁷¹⁾。またブラウロンからも同様の目録が出土しているが、こちらがオリジナルであるとされ、アクロポリスに建てられた目録はブラウロンのコピーであったと考えられている⁷²⁾。奉納目録は碑文として石に刻まれており、「いつ、誰が、何を」アルテミスに捧げたか、という情報が以下のように記録されている。

……[カ] リマコスがアルコンの年（前349/8年）。多色彩の、[縁飾りのつい] たキトニスコス、カリッペ（が捧げた）。これには文字が織り込まれている。カイリッペとエウコリネが、斑模様（の衣服を捧げた）、箱の中（に保管）。フィ[ル]メネが、[ア]モルギス製のキトン（を捧げた）。テオフィロスがアルコ[ン]の年（348/7年）。ピュティアスが斑模様のクシュスティドトス（を捧げた）。……⁷³⁾

……エウブロスがアルコンの年（前345/4年）。アルテミスに捧げられたものと記されたアンペコノン、古い座像に着せかけて（保管）、テアノ（が捧げた）。アンペコノン、古い座像に着せかけて（保管）、[ベ]ンテテリス（が捧げた）。……⁷⁴⁾

……ナウシス [トラ] テが黄金の小さな盾 (を捧げた), 重さは2ドラクマ 4.5 オボロス。黄金の首飾り, 重さは […欠…。]。黄金のスカラベ (を捧げた), 重さは 4.75 オボロス。キュダテナイオン区のアグノテオスの妻ソス [トラテ] が, [黄金の] 耳飾り (を捧げた), 重さは6ドラクマ 2.75 オボロス。エシュキアが, たくさんの [黄金の] 指輪 (を捧げた), 重さは 5.75 オボロス。……⁷⁵⁾

目録には前 353/2-334/3 年に奉納されたものが記録されている⁷⁶⁾。この目録から読み取れる奉納者はすべて女性であり, 貴金属類や装飾品, 鏡など女性に関係の深いものが多くブラウロンの聖域に納められていた。なかでも多くを占めるのが女性の衣類である。女性たちは奉納のために新しい衣類を仕立てるのではなく, 自身が使っていたものを女神に奉納していたと考えられている⁷⁷⁾。

奉納者がどのような目的で衣類を奉納したかは明記されていない。しかし, 「誰その妻」という記述がいくつか見られることから, 奉納者のなかには既婚女性がいたことがわかる。奉納の目的を知るには, アルテミスへの奉納に言及したわずかな文献資料も手掛かりになる。『ヒポクラテス集成』のなかの処女の病について記された論文には, 結婚適齢に達した処女たちが月経に伴う様々な症状から回復した後, アルテミスに自分の衣服のなかで最上のものを捧げたことが述べられている⁷⁸⁾。また, 時代は下るが, 『バラティン詞華集』には出産を無事終えられたこと, 息子が立派に成長することを願って, 女性がアルテミスに衣服を奉納するという詩が収められている⁷⁹⁾。アルテミスに対して奉納を行う女性たちは, 女性だからこそ経験する悩みや不安について, 女神に庇護を求めている。このような目的がブラウロンでの奉納にも当てはまるとすれば, 女性たちはここでもやはり人生の様々な局面でこの女神に頼り, 奉納を行っていたと考えられる⁸⁰⁾。アルクトイの役目を務めたのとはほとんど変わらない年齢から, 少なくとも結婚して出産を経験する頃まで, アッティカの女性たちはアルテミス・ブラウロニアと深い関わりを持ち続けた。

ブラウロンにおけるアルテミスへの奉納の概要は以上の通りだが, 奉納物はどうな女性たちによって, どのような形で納められていたのだろうか。

奉納目録には奉納者の女性の名前が刻まれているが, その多くが女性の名前単独で記録されている。通常, 法廷弁論等において女性の名前が男性の係累を挙げることで表現されていた(「誰その妻, 母, 娘」)ことを考えると, これは特徴的な点であると言えよう⁸¹⁾。また男性の係累によって表現されている女性のうち, 「誰その妻」「誰その娘」という表記は多く見られるものの, 少なくとも衣服の部分においては「誰その母」という表記は確認できない。このことから, 奉納を行っていた女性のうち多くは未婚か, 結婚していてもまだ子供が生まれていない, あるいは子供が幼い若妻であったことが推測できる。

奉納目録に記録されているもののうち大部分を占める衣類については, 銘文に種類や色, 装飾の有無, 状態(「織りかけ」等)まで詳細に記されている。またしばしば「箱の中」や

「籠の中」というように、具体的な保管場所の情報が与えられている。なかでも注目に値するのが「像に着せかけてある」という記述で、おそらく奉納物を納めた神殿内に、複数の像が存在したことが目録から読み取れる⁸²⁾。女神に捧げられた衣類のうちの一部は、神殿のなかに堂々と展示されていたということであろう。

では、以上で確認した奉納目録の内容を踏まえて、実際に儀礼と奉納がどのように絡み合っていたのかを以降の節で考察していきたい。

第2節 儀礼と奉納の関係

儀礼と奉納とを結びつけるためには、二つの手掛かりが考えられよう。一つは奉納者の社会的地位、もう一つは聖域という空間における奉納目録、奉納物のモノとしての存在である。

ブラウロンでアルテミスへの奉納を行った女性たちは、おそらくある程度経済的に余裕のある階層の人々であった。聖域までの移動費用はさることながら、貴金属類や装飾品といった高価な奉納物を納めている。衣類に関しては多くが古着であるが、前述の『ヒポクラテス集成』の記述などから、女性たちがそれなりに高価な衣類を捧げていたことがわかる⁸³⁾。さらに銘文に女性の名前しか刻まれていない例が多いことを考えると、アルテミス・ブラウロニアへの奉納は、男性にとってさほど関心の的でなかったことが窺える。男性たちの世界においてもこの女神への奉納が名誉なことであると認識されていた、あるいは、実際に利益を及ぼすものであったならば、積極的に夫や父である自身の名前を書かせ、宣伝したことであろう。もちろん奉納の費用を女性自身が出したという可能性も考えられるが⁸⁴⁾、いずれにせよ男性の関心外である出来事に対して多額の費用をかけられるということは、彼女たちが富裕層に属していたことを示唆する⁸⁵⁾。

さて、富裕層出身の女性という特徴は、前章で検証した儀礼参加者の特徴と一致しており、儀礼に参加した少女が後にアルテミスへの奉納を行っていた可能性は十分に考えられる。したがって、儀礼と奉納は実践する儀礼参加者／奉納者にとって一続きの宗教活動であったと考えるべきであろう。

もう一つの手掛かりとして、聖域という空間を形成する奉納目録や奉納物のモノとしての存在が、見る者に及ぼした影響を想定することができる。ブラウロンの発掘調査によれば、奉納目録を刻んだ石はアルテミス神殿付近から多数出土している⁸⁶⁾。さらに目録を建てていた礎石は、聖域のなかで最も目を引く巨大なストアとアルテミス神殿に沿って並んでおり⁸⁷⁾、聖域を訪れた人々の目についたことが想像できる（図1,2参照）。またアルテミスに捧げられた衣類の一部は、神殿のなかで「像に着せられて」展示されていた。女性の古着を着ているということは、神像は人間と同じくらいの大きさであったであろうから、訪れた人々の目にも留まったことだろう。

このことは当然、儀礼のためにブラウロンを訪れた少女たちにも当てはまる。アルクトイ

という宗教的な役目を果たすべくして集まった少女たちには尚更、アルテミスの神像は注意を引いたに違いない。奉納目録の銘文を読むことができたかは不明であるが、読めなかった場合でも周囲の大人や男性たちに読んでもらった可能性は十分考えられる⁸⁸⁾。人生の「先輩」である女性たちが、出産の無事や子供の成長を祈って捧げた奉納物の数々は、これから大人の女性としての人生を歩み始める彼女たちに強い印象を与えたことだろう。少女たちは、先達が結婚後どのような生き方をしたのかを知り、女性として直面する人生の様々な局面で、アルテミスの庇護を求めることが「女性」にふさわしい生き方であるということを実感した。展示されていたのが女性たちの織った衣類であったということも、この場合大きな意味を持つ。古代ギリシアにおいて、女性の重要な仕事は機織りであった⁸⁹⁾。女神像に着せかけられた織物は、出産・育児だけではなく、彼女たちが生きていく社会で求められていた、もう一つの女性の役割を少女に思い起こさせた。聖域や神殿のなかで見聞きするものが、少女たちに「女性」としてどのように生きていくべきか、という考え方を自然と身に着けさせたのである。

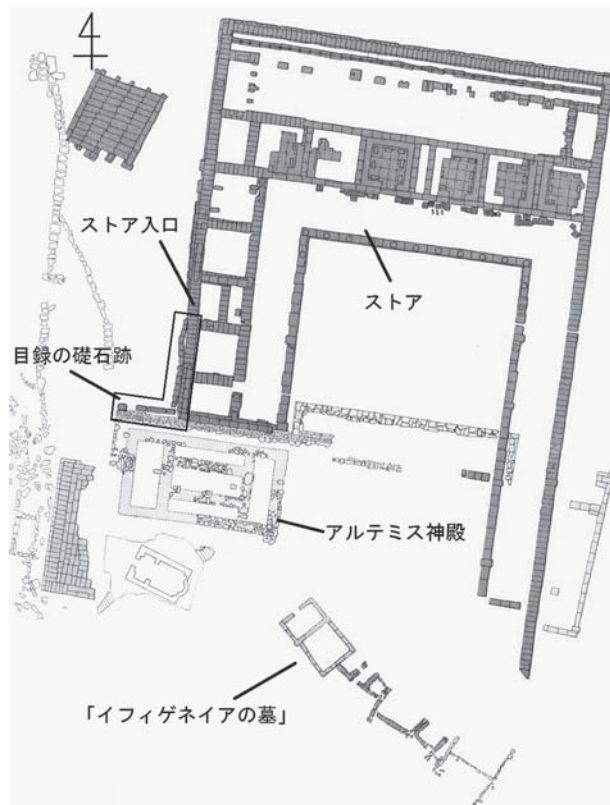


図1 ブラウロンの聖域 ※ Papadimitriou (1963): 114 をもとに筆者が作成。



図2 北側から見たアルテミス神殿の礎石。神殿手前には上部に窪みのある奉納目録の礎石の列が並び、途中でL字に折れ曲がって手前に伸びている。写真外左側にはストアがある（筆者撮影）。

第3節 ブラウロンにおける宗教的行為の機能

以上の考察を踏まえて、改めてアルクテイアという儀礼、ひいては奉納も含めたブラウロンにおける宗教的行為が、アテナイ社会に生きる女性たちにとってどのような機能を果たしていたのか、という問いに戻りたい。

まず、儀礼参加者と奉納者はほぼ同じ社会的階層に属する女性であり、一人の女性が儀礼と奉納の両方を経験していた可能性が高い。このことから、儀礼と奉納に携わる女性には、両者は連続した一つの宗教活動として捉えられていたと考えられる。このような儀礼と奉納の連続性という観点から考えるならば、アルクテイアは一人前の女性としてアルテミスとの付き合いを始める契機であったと言えるだろう。妻・母という新しい社会的身分への移行だけでなく、女神との新しい関係を築き始めるという宗教的な機能も持ち合わせていた⁹⁰⁾。

また、少女たちが儀礼の際に聖域や神殿内で目にしたであろう奉納目録や奉納物は、彼女たちが「女性」としての生き方のイメージを獲得するプロセスにおいて大きな役割を果たしていた。それは、アルテミスとの関わりの中で女性が実際にどのように生きていくべきなのかを、先達が少女たちに示す道標のようなものだったのである。特に展示された衣類は、少女たちに機織りという重要な女性の仕事を想起させた。

ブラウロンから出土した赤像式クラテリスコイのなかに、興味深い図像が描かれている。あどけなく走り回るアルクトイよりも少し年長に見える女性が、一人の少女の身体に手をかけている。カイルは、これは若い女性が少女の身支度をしてやっている場面であると考え

る⁹¹⁾。このような場面が実際のブラウロニア祭で起こっていたならば、既にアルクテイアを済ませた先輩女性たちが主役の少女たちの世話をし、互いが交流する場が生まれていたと想定することができる。そこでは目録や奉納物を見るよりも、より具体的な話を聞くことができたはずである。もちろん、女性としての生き方や仕事の多くは家庭において母親から学ぶ部分が大きかったであろうが、私的領域に籠もることの多かった古典期アテナイの女性たちにとっては、家の外で母親以外の人々から学ぶことにも、母親から得られたイメージを確認し一般化するという大きな意義があっただろう。

アルクテイアに参加した少女たちは、ブラウロンという場所で先輩の女性たちが奉納したものの目録を目にし、自分がこれから妻・母として生き、大事なときにはアルテミスに頼ることを教わった。そして展示された衣服を目にして女性の重要な家の仕事を再確認し、大人の女性となるべく気を引き締めた。以上のようなプロセスでアテナイの「女性」のイメージが女性たち自身によって認識されていったのである。

おわりに

前章までの分析を通じて、本稿では以下のことを明らかにしてきた。アルクテイアは、結婚や性的成熟と結び付く儀礼であり、少女が大人の女性に「なる」べく参加するものであった。結婚を控えた娘たちはブラウロンに赴いてアルテミスに対し儀礼を執り行う。そして、同じ聖域内に建てられた奉納目録を見たり（あるいは読んでもらったり）、実際に捧げられた衣類を目にしたりして、女性とはかく生きるべきという具体的なイメージを膨らませた。アテナイの少女たちは儀礼に参加することで、アテナイにあるべき女性像を内面化していったと考えることができる。そして、やがて結婚し出産を経験するにあたって、自分たちも同様の奉納を实践する。それらの奉納物や目録を見て、未来の妻や母になるべき次の世代が同じイメージを獲得していく。このようにアテナイの女性像は、ほかならぬ女性たち自身の手によって、世代から世代へと再生産されていくものであった。このサイクルにおいてアルクテイアとは、未婚の少女が妻、将来的には母という新たな社会的身分に移行するための儀礼であり、同時にアルテミス・ブラウロニアという女神に対して今後積極的に関わっていく出発点でもあったのである。

国家祭儀であったブラウロニア祭は、当然ポリスによって運営される公的な祭儀であった。非市民女性が参加していた可能性を完全に排除することはできないが、おそらく参加者は市民身分の女性であることが前提とされていた⁹²⁾。このことを踏まえると、ブラウロンでの宗教的行為を通じて得られたイメージとは、アテナイ市民としての女性像であったと言えるのではないだろうか。ブラウロニア祭は公職であるヒエロポイオイに運営が任じられており、聖域の管理にも国家が関わっていたことが推測される⁹³⁾。本稿で提示してきた世代を越えて再生産されていく女性のイメージとは、儀礼や奉納の副次的な結果として生じたもの

であったかもしれないが、ボリスがこれらの宗教的行為を利用し意図的に「都合の良い女性像」を作り上げていたと考えることもできるであろう。本稿では参加者である女性たちの眼差しを再構成することを目的としたため、国家祭儀としての側面やボリス及び男性たちの関わりについて掘り下げることはできなかったが、このような点にも着目した研究がなされれば、女性史に留まらない大きな意義を持つものになるのではないかとと思われる。

本稿では、古典期アテナイの女性たちが「女性」というイメージをいかに受け入れ、内面化していったかというプロセスを解明することを目標とし、女子の成熟の儀礼を扱った。しかし、古代ギリシア世界全体について論じることは筆者の力量を大きく超える仕事であり、また史料の問題もあって、今回は古典期アテナイという一時代、一地域に限定せざるをえなかった。ただし、アルテミスに対する少女の儀礼や女性たちの奉納という現象は、地域的にも時代的にも広い範囲で確認されており、本稿で得られた成果をある程度敷衍することは可能ではないかと考える⁹⁴⁾。

また、アルクテティアという儀礼、及び女神への奉納活動を実践した女性たちは、比較的富裕な家庭の出身であろうという分析結果が得られた。そのため、本稿で検討した「女性」のイメージの獲得の過程は、あくまで一部の女性たちに限定されることになってしまった。古代ギリシア世界に生きた女性たちは当然のごとく一枚岩ではなく、市民身分であるか否かや、経済状況、ライフスタイルによっていくつかのカテゴリに分類されうると筆者は考える。したがって、今回は考察対象にすることができなかった、より社会的地位の低い女性たちにも今後目を向けることが必要であろう。

註

※史料や欧語文献の略称は、S. Hornblower and A. Spawforth (eds.), *The Oxford Classical Dictionary* 4th ed., Oxford, 2012, 及びウェブサイト *Perseus Digital Library* (<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/>), *L'année philologique* (<http://www.annee-philologique.com/>) に掲載されているものに原則従ったが、慣例に倣ったものもある。また、註において複数回言及されている文献は、初出のものに限りその書誌情報をすべて表記するが、それ以降については【著者名 (出版年), ページ数】という形式で記す。

- 1) 西村賀子 (2008) 「西洋古典学におけるジェンダー研究—その歴史と展望(1)」『和歌山県立医科大学保健看護学部紀要』4, 14-15 頁。
- 2) 古代ギリシア、とりわけアテナイにおける女性の諸権利や生活、及び抑圧の実態については、わが国では桜井万里子の概説書によって広く知られているところである。桜井万里子 (2010) 『古代ギリシアの女たち—アテナイの現実と夢』中央公論社。
- 3) 桜井万里子 (1986) 「古代ギリシア女性史研究—欧米における最近の動向」『歴史学研究』552, 33-45 頁。また 1980 年代以降の代表的な女性史・ジェンダー史研究については、以下に整理されている。西村賀子 (2009) 「西洋古典学におけるジェンダー研究—その歴史と展望(2)」『和歌山県立医科大学保健看護学部紀要』5, 1-8 頁; L. McClure (2009) “Sexuality and Gender”, in: G. Boys-Stones, B. Graziosi and P. Vasunia (eds.), *The Oxford Handbook of Hellenic Studies*, Oxford/New York: 305-15.
- 4) 史料中に ἀρκετία という語が見られるのは後 5 世紀のヘシキオス (Hesychius s. v. ἀρκετία) のみであり、儀礼が行われた当時にこの語が使われていたかは定かでない。しかし研究史においては

- この儀礼を指す語として一般的に用いられているため、本稿もそれに従う。
- 5)ブラウロンの聖域自体の起源は古く、先史時代からこの地で何らかの宗教的行為が行われていたと考えられている。J. Papadimitriou (1963) "The Sanctuary of Artemis at Brauron", *Scientific American* 208-6: 113. しかしブラウロニア祭及びアルクテアの存在を文献資料上で確認できるのは古典期になってからであり、本稿でも古典期における宗教活動を対象に論じたい。
 - 6)アルクテアは通説では少女の性的成熟を表すいわゆる通過儀礼であったと捉えられているが、儀礼の内容に関しては不明な点がありにも多く、儀礼の性格についても未だ議論的となつている(第1章参照)。この論点についての詳細な考察は第2章で行う。またパーカーはアテナイの宗教儀礼を「通過儀礼」などのカテゴリに分類することに対し、各祭儀の個性を損ないかねないとして慎重な姿勢を見せている。R. Parker (2005) *Polytheism and Society at Athens*, Oxford. : 山内暁子 (2008) 「文献解題「アテナイの宗教」について語ること—R. Parker, *Polytheism and Society at Athens* における儀礼と信仰」『西洋古代史研究』8, 65-77 頁。パーカーの著書以前の研究史においては、子供の成熟や大人への移行を表す儀礼であるとしてアルクテアを「通過儀礼」「イニシエーション」(rite of passage, transition rite, initiation) と表現していることが多い。本論ではパーカーの指摘を踏まえ、先行研究に言及する際を除き、通過儀礼という語の使用は避ける。
 - 7) Paus. 1.23.7.
 - 8) Papadimitriou (1963): 120.
 - 9) [Arist.] *Ath. Pol.* 54.7.
 - 10) 古典期では祭儀の開催年を含めた数え方をしており、直訳すると「5年に一度」となる πεντετηρίς は「4年に一度」という意味で用いられていた。アリストテレス(村川堅太郎訳)『アテナイ人の国制』岩波書店、1980年、247頁; P. J. Rhodes (1981 [with addenda 1993]) *A Commentary on the Aristotelian Athenaion Politeia*, Oxford: 606. また2014年刊行の橋場弦訳でも「4年に一度」と訳されている。アリストテレス(橋場弦・國方榮二訳)『アリストテレス全集19』岩波書店、2014年、148頁。この点についての詳しい分析は第2章に譲る。
 - 11) ただしファラオネは、ブラウロニア祭のなかで行われた「クマの儀礼」とアルクテアは別の儀礼であると主張している。C. A. Faraone (2003) "Playing the Bear and Fawn for Artemis: Female Initiation or Substitute Sacrifice?", in: D. B. Dodd and C. A. Faraone (eds.), *Initiation in Ancient Greek Rituals and Narratives*, London: 43-68.
 - 12) Ar. *Lys.* 641-47. 以下の文献に収録されたテキストに基づく拙訳。F. W. Hall and W. M. Geldart (eds.), *Lysistratam, Thesmophoriazusas, Ranas, Ecclesiazusas, Plutum, fragmenta, indicem nominum continens* (Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis, Aristophanis Comoediae) 2nd ed., Oxford, 1907. 原文は韻文であるが、本稿ではテキストの内容に注目するため散文調で訳した。ここで言及されるアレフォロス、アレトリス、カネフォロスはそれぞれ古典期の少女の宗教的役目である。「聖秘物運び」と訳されるアレフォロスに関しては Paus. 1.27.3 に詳しい記述があるが、これは7歳から11歳の少女4人(2人とする説もある)が上流家庭のなかから民会の決議によって選出され、アテナ女神のために宗教的役目を果たしたという。アレトリスは「粉挽き女」と訳され、おそらくアテナ女神に供える菓子を作ったと考えられているが、史料が非常に乏しいため詳しいことは分かっていない。カネフォロス(「聖籠運び」)は供犠など種々の宗教儀礼に従事する極めて名誉のある役目であり、一般的には結婚適齢期の娘がこれを務めたとされている。桜井(2010)、48-61頁; L. ブリュイ=ゼドマン(2000)「パンドラの娘たち—ポリスにおける女たちと儀礼慣習」(山内暁子訳) G. デュビイ・M. ペロー監修, P. シュミット=パンテル編『女の歴史I 古代』(杉村和子・志賀亮一監訳) 藤原書店、541-613頁。
 - 13) アルクテア、あるいはブラウロニア祭に直接言及しているものは以下の通り。『スタ』Suda s. v. Ἀρκτος ἢ Βραυρωνίως, ハルボクラティオン Harp. s. v. ἈΡΚΤΕΥΣΑΙ, s. v. ΔΕΚΑΤΕΥΕΙΝ, ヘシキオス Hesychius s. v. ἀρκτεία, s. v. Βραυρωνίως, s. v. Δεκατεύειν.
 - 14) しかし発掘者パバディミトリウの急死により、調査は1963年に打ち切られた。今なお発掘されていない部分が残し、さらに出土品に関しても大部分が未発表であるという。Parker (2005): 228f.
 - 15) 陶片には裸身あるいは短いキトンを着た少女たちが、手に松明や花冠を持ち、火の燃える祭壇の

周囲を走り回ったり、ダンスをしたりする様子が描かれている。アルテミスと関わりの深いヤシの木の描写も多い。ここには様々な年齢の少女たちが描かれており、彼女たちの年齢を特定することは難しいが、カイルはおそらく8歳から13歳くらいであろうと推測している。クラテリスコイの破片はブラウロンだけでなく、アッティカ全土のアルテミスの諸聖域やアテナイのアクロポリスからも出土しており、他の聖域から出土した陶片にも同様の絵が描かれていることから、ブラウロン以外のアルテミスの聖域でもアルクテイアのような儀礼が行われていたと推測されている。L. Kahil (1977) “L’Artémis de Brauron: Rites et mystère”, *AK* 20: 86-98. またこの陶器の内側で火を燃やした痕跡があることから、実際に儀礼で使われていたとする説もある。E. Stehle (2012) “Women and Religion in Greece”, in: S. James and S. Dillon (eds.), *A Companion to Women in the Ancient World*, Malden: 198.

- 16) H. Jeanmaire (1939) *Couroi et courètes: Essai sur l’éducation spartiate et sur les rites d’adolescence dans l’antiquité hellénique*, Lille; A. Brelich (1969) *Paides e parthenoi*, Rome. 筆者未見, C. Sourvinou-Inwood (1971a) “Review of A. Brelich, *Paides e parthenoi* (Rome 1969)”, *JHS* 91: 172-77 に拠った。
- 17) この項は古註とほぼ同じ内容を伝えているため、古註を参照して執筆されたと考えられるが、古註 L, R のどちらにもない情報も含んでいる。
- 18) H. Jeanmaire (1939): 259f.
- 19) C. Sourvinou-Inwood (1971a): 174f.
- 20) 多くの研究者が “οὔτε πρεσβύτεραι δέκα ἐτῶν οὔτε ἐλάττους πέντε” (古註 L) を「10歳より年上でなく5歳より若くない」と取り5歳から10歳としているが、「10歳以上でなく5歳以下でない」と取り、6歳から9歳とする説もある。6歳になった時点から9歳を終える時点までを年齢条件とすれば年齢幅がちょうど4年となり、祭儀の開催間隔とも一致するため、どの年に生まれた少女にも平等に参加の機会が巡ってくることになる。桜井 (2010), 53 頁。しかし Harp. s. v. ΔΕΚΑΤΕΥΕΙΝ や Hesychius s. v. δεκατεύειν の記述を考慮して5歳から10歳と取る方が一般的である。
- 21) ただし、クラテリスコイの図像から少女たちの正確な年齢を導くことは難しいとの指摘もある。Stehle (2012): 199. またマリナトスは、この図像に描かれているのはアルクトイだけではなく、様々な年齢集団の少女たちであると主張する。N. Marinatos (2002) “The Arkteia and the Gradual Transformation of the Maiden into a Woman”, in: B. Gentili and F. Perusino (eds.), *Le orse di Brauron: Un rituale di iniziazione femminile nel santuario di Artemide*, Pisa: 32.
- 22) C. Sourvinou-Inwood (1971b) “Aristophanes, *Lysistrata* 641-647”, *CQ* 21: 339-42.
- 23) Ar. *Lys.* 641-47 の校訂をめぐる議論に関しては以下に詳しい。戸部順一 (2011) 「「着る」のか「脱ぐ」のか? —アリストパネス作『女の平和』645 行の読みについて」『ヨーロッパ文化研究』30, 121-56 頁。
- 24) T. C. W. Stinton (1976) “Iphigeneia and the Bears of Brauron”, *CQ* 26: 11-13.
- 25) 例えば, J. Henderson (ed.), *Aristophanes’ Lysistrata*, New York/Oxford, 1987. また Loeb Classical Library にもヘンダーソンのテキストが収録されており、現在では *kai χέουσα* がよりポピュラーな読みであると言える。
- 26) 筆者はスルヴィヌー＝インウッドの説には再考の余地があると考えている。詳細な検証は第2章で行う。
- 27) P. Perlman (1983) “Plato Laws 833C-834D and the Bears of Brauron”, *GRBS* 24: 115-30.
- 28) Marinatos (2002): 38.
- 29) “ἐπιλεγόμεναι παρθένοι”. 第2章で詳しく述べる。
- 30) 聖域の大きさに対して「すべての乙女」の数が多すぎるとの指摘は、パーカーによってなされている。Parker (2005): 233. 「選ばれた少数者」説を支持するのは、ジャンメール、パーク、ダウデンら。なかでもジャンメールとパークは、アルクテイアへの参加は限られた上流階級の特権かつ義務であったと主張する。Jeanmaire (1939): 259f; H. W. Parke (1977) *Festivals of the Athenians*, London: 139f; K. Dowden (2011) “Initiation: The Key to Myth?”, in: K. Dowden and N. Livingstone (eds.), *A Companion to Greek Mythology*, Malden: 491f.
- 31) E. Simon (1983) *The Festivals of Attica: An Archaeological Commentary*, Madison: 86.

- 32) Perlman (1983): 128, n. 75. 彼女はブラウロンのアルクティアが全員参加であったとすれば、アッティカ地方に女子の年齢階梯制が存在していたという彼女の説を補強するものになると考えている。
- 33) C. Sourvinou-Inwood (1990) "Lire l'arkteia: Lire les images, les textes, l'animalité", *DHA* 16-2: 45-60.
- 34) Perlman (1983): 118f.
- 35) P. Perlman (1989) "Acting the She-Bear for Artemis", *Arethusa* 22: 111-33.
- 36) Perlman (1983): 128-30.
- 37) 古代ギリシア世界で比較的広く見られる若い娘たちの儀礼行動。ピンダロスやアルクマンの乙女歌にその様子が描かれている。最も美しい少女がコレグスと呼ばれる長を務め、彼女に率いられた同年代の娘たちが歌い踊る。ブリュイ＝ゼドマン (1990), 557-58 頁。
- 38) Marinatos (2002): 29-32. カラムによれば、古代ギリシアの乙女のコロスは若い女性たちの社会化のための手段であり、そこで行われる歌と踊りが女性のアイデンティティを形成するという。C. Calame (translated by D. Collins and J. Orion) (1997) *Choruses of Young Women in Ancient Greece: Their Morphology, Religious Role, and Social Function*, Lanham (筆者未見, Marinatos (2002) に拠った). マリナトスもコロスでは同性愛的なことが行われ、将来結婚する際に必要なセクシュアリティを学ぶ場であったと考察する。
- 39) 桜井 (2010), 48-61 頁。
- 40) Faraone (2003): 43-68.
- 41) J. Larson (2007) *Ancient Greek Cults: A Guide*, New York/London: 108.
- 42) 桜井 (2010), 84 頁。
- 43) 本稿註 12 で述べた通り、アレフォロスなど一部の儀礼は数名の少女によってのみ行われていた。したがって、実際にアリストファネスの 4 つの宗教儀礼を彼の詩句通りに務めた女性は、ごく少数であっただろう。少なくとも儀礼を行う女性たちにとって、これらの儀礼が体系的なひとまとまりのものとして捉えられていたとは断言できない。アレフォロスとアレトリスはアテナ女神への儀礼であることが分かっており、カネフォロスもアテナ女神の祭儀であるパンアテナイア祭での務めが代表的である (ブリュイ＝ゼドマン (1990), 554 頁。パンアテナイア祭の行列を描いたとされるパルテノン・フリーズにもカネフォロスが描かれている。長田年弘 (2013) 「パルテノン・フリーズ浮彫における女性とメトイコイー「民主政讃歌」説の批判」『西洋史研究』新輯 42, 197 頁)。別の女神の儀礼からの安易な類推は避けられるべきであろう。
- 44) Marinatos (2002): 33.
- 45) 註 10 を参照。LSJ s. v. πεντετηρίς.
- 46) ここにブラウロニア祭という語は明記されていないが、ここで引用されているアリストファネス『平和』876-77 行 (Ar. Pax 876-77) はブラウロニア祭について言及した箇所であるため、この項はブラウロニア祭の説明をしていると考えられる。ここでなぜディオニュシア祭という語が用いられているかは定かではないが、ロイド＝ジョーンズはディオニュシア祭及び娼婦に関する記述を, Ar. Pax 874 (ブラウロンへの道中で男たちがほろ酔いになり、女性に対し性的な行為に及んだことを示唆する台詞) を説明するために捏造された内容であると推測している。Lloyd-Jones (1983): 92, n. 31.
- 47) Suda s. v. Βραυρόν の原文では τὴν προκτοετηρίδα となっているが、引用元の本文では τὴν προκτοπεντετηρίδα とされているためこのように修正した。この語自体はアリストファネスの造語であるが、日本語に訳すならば「4 年に一度 (5 年に一度) しか拝めない尻」というような意味になる。
- 48) 例えば、後 9 世紀のコンスタンティノポリス総主教フォティオスは『図書総覧』において、トラレスのフレゴン (後 2 世紀, ハドリアヌス帝の解放奴隷) による『年代記集成とオリュンピア祭優勝者一覧』について記している。そのなかで「第〜オリュンピアド」(オリュンピアドはオリュンピア祭の開催年から始まる 4 年の期間) という年の数え方に言及しているため、オリュンピア祭が「4 年に一度」開催されていたことを知っていたと考えられる。Phot. Bibl. 97.
- 49) R. Parker (1996) *Athenian Religion: A History*, Oxford: 270.

- 50) 5 歳になった瞬間から 10 歳になる瞬間まで (9 歳を終える瞬間まで) とすれば、期間はちょうど 5 年になる。
- 51) Ar. *Lys.* 42-48. 丹下和彦訳。
- 52) Ar. *Lys.* 219-22.
- 53) 第 1 章で述べた通りスルヴィヌー＝インウッドはクロコトスを「脱ぐ」という意味を持たせ、「5 歳から 10 歳」という古註 L と S の記述を支持した。彼女によればクロコトスは大人の女性 (妻) にふさわしい性的な魅力と、排除されるべき過度の性欲という二重のイメージを持つものである。少女たちはこれを着る、そして脱ぐという二つの行為を通して妻にあるべき性的な魅力を得ると同時に、処女特有の過度の性欲を捨てるとののだという。Sourvinou-Inwood (1990): 56f. しかし相反する二つのイメージのうち片方のみを得、もう一方のみを捨てるという解釈にはいささか無理があるように思われる。またパールマンが指摘するようにスルヴィヌー＝インウッドの校訂には不自然な点が多く、前節で 5～10 歳説が有力なものでないことが示されたことを踏まえると、あえて彼女の校訂及び「脱ぐ」説を支持する理由はないであろうと筆者は考える。Perlman (1983): 118f.
- 54) Hdt. 6.138.1.
- 55) 後世の史料であるが、ルキアノス『冥界下り、あるいは僧主』に付された古註には、ヘロドトスによって書かれたこの事件について言及する部分がある。そこには「ブラウロンで女神のためにアルクテイアを行う乙女たちを誘拐した ἡρπασαν παρθένους ἀρκετευομένας τῇ θεῇ τοῖς Βραυρωνίοις」と記されている。Scholia to Luc. *Catapl.* 25.
- 56) イフィゲネイアとブラウロン及びアルクテイアの深い関係は、ほとんどの先行研究において指摘されている。古註 L には、イフィゲネイアの犠牲がよく知られたアウリスではなくブラウロンにて行われ、シカではなくクマと取り替えられたと記されている。また、ブラウロンの発掘調査では神殿やストアの南側に小さな遺構が発見されており、「イフィゲネイアの墓」と呼ばれている。Papadimitriou (1963): 115. ブラウロンはミュケナイ時代から人が住んでいたことが確認されているが、イフィゲネイアは元々この地で信仰を集め、アルテミスの伝来によって統合あるいは降格させられた女神だったのではないかとする説は、ある程度の説得力を持って受け入れられている。Papadimitriou (1963): 113; Lloyd-Jones (1983): 95.
- 57) トロイア戦争の開戦時に、アルテミスを怒らせたことが原因で船を出せなくなったアカイア勢は、イフィゲネイアの犠牲によって女神の怒りを解くことができると知り、彼女の命を捧げる。
- 58) Eur. *IA* 98-105.
- 59) Aesch. *Ag.* 239.
- 60) Eur. *IT* 1462-67. ここではアテナ女神がイフィゲネイアに対し、彼女が死後ブラウロンで埋葬され、彼女の墓には産褥で死んだ女性たちが家に遺した衣類が捧げられることを予言している。
- 61) パーカーは、イフィゲネイアとアルクトイに一定の共通点は見出せるものの、大きな相違点もあると指摘する。イフィゲネイアは共同体の利益のために命を差し出し、アルクトイも古註 R や S の記述に見られるように、都市を災いから救うために女神に仕えている。しかし、アルクトイは共同体のためだけでなく、自らの利益のためにも自身を捧げる。アルクテイアには、アルテミスに敵意を向けられぬよう先手を打ち、女神をなだめるという意義があった。また、アルクトイには結婚・出産という未来があるのに対し、イフィゲネイアにはどちらも与えられなかった。このように両者の運命は途中から袂を分かっていったというのが彼の主張である。Parker (2005): 241. しかし彼の指摘は、アルクトイが性的成熟を迎えた娘であったことを否定するものにはならないであろう。
- 62) アリストファネスの詩句には含まれていない少女の宗教的役目も確認されている (パンアテナイア祭でアテナ女神に奉納するペプロス (聖衣) を織るエルガスティナイ。桜井 (2010), 51 頁)。また、本稿註 12 及び註 43 でも述べたが、一部の儀礼はごく少数の少女によってしか行われなかった。Ar. *Lys.* 641-47 は少女の宗教儀礼の全容を描いた史料というよりも、ある女性の一事例を挙げたものとして解釈する方が妥当であろう。
- 63) Kahil (1977): 87f.
- 64) Simon (1983): 86. また Suda s. v. Ἐμπαρός εἶμι に、ブラウロンの儀礼の起源神話とよく似た内容のムニュキアの逸話が伝えられていることも興味深い。パーカーはムニュキアで儀礼が行われてい

- たことは認めるものの、クラテリスコイが出土したすべての聖域で行われていたとする史料の根拠はないということを指摘している。Parker (2005): 233, n. 70.
- 65) 例えばブリュイ＝ゼドマン (1990), 562 頁; 桜井 (2010), 58 頁。
- 66) 本稿註 43 参照。
- 67) G. Stein (ed.), *Scholia in Aristophanis Lysistratam*, Göttingen, 1891: 28.
- 68) Stehle (2012): 199.
- 69) 少女たちが儀礼に際してどのくらいの期間聖域にいたのかは明らかになっていない。スルヴィヌー＝インウッドやファラオネは 1 年程度と想定しているが、マリナトスのように一定期間滞在したということすら疑う研究者もいるため、アルクテアが数日あるいは数か月、数年の滞在を伴うものであったと断定することはできない。C. Sourvinou-Inwood (1988) *Studies in Girls' Transitions: Aspects of the Arkteia and Age Representation in Attic Iconography*, Athens: 21. Faraone (2003): 67, n. 57; Marinatos (2002): 30f, n. 7.
- 70) アルテミス・ブラウロニアの奉納目録は、前年までに奉納されたものに関しても毎年繰り返して調査・記録されていたため、同一の銘文が複数の碑石に何度も刻まれている。R. Osborne (1985) *Demos: The Discovery of Classical Attika*, Cambridge: 158. そのため目録の全容を把握するためには、IG に収録されているテキストを順番通りに読むのではなく、どの部分が同じ銘文の繰り返しなのかを検証し編集し直す必要がある。目録の衣類の部分に関してはクレランドがその作業を行っているため、本稿では彼女のテキストを主に参照し、奉納物の特徴を整理した。L. Cleland (2005) *The Brauron Clothing Catalogues: Text, Analysis, Glossary and Translation*, Oxford.
- 71) IG II² 1514-25, 1528-31. またアゴラから発見された 3 つの断片 (A. W. Woodward (1963) "Financial Documents from the Athenian Agora", *Hesperia* 32-2: 170-82, No. 8-10) もアルテミス・ブラウロニアの奉納目録の一部であると考えられている。T. Linders (1972) *Studies in the Treasure Records of Artemis Brauronia Found in Athens*, Lund: 2-4.
- 72) Papadimitriou (1963): 113; Linders (1972): 70-73. ただしブラウロン出土の碑文 (奉納目録以外も含め) は短い発掘報告等に一部が紹介・引用されているのみで、体系的な刊行には至っていない。アクロポリス出土の目録の方がより数が多く、研究も充実しているため、本章ではアクロポリス出土の目録を扱う。
- 73) IG II² 1514 7-11. キトニスコス χιτωνίσκος/χιθωνίσκος, キトン χιτών, クシユステイドトス ξυστιδωτός はそれぞれ衣服の種類を指す。
- 74) IG II² 1514 34-37. アンペコノン ἀμπέχονον は衣類の種類で、ショールのようなもの。「古い座像に着せかけて」は原文では περὶ τῷ ἔδει τῷ ἀρχαίῳ.
- 75) IG II² 1517 8-13.
- 76) Linders (1972): 5. この奉納目録の年代には、古典期という時代のイメージからやや外れる年代も含まれている。しかしブラウロンにおける奉納自体は前 700 年頃から続く宗教的慣習であり、短期間に奉納の目的や様式が大きく変わるとは考えにくいので、今回は考察対象に含めた。Papadimitriou (1963): 115.
- 77) Dillon (2002): 21; Osborne (1985): 158.
- 78) Hippoc. *Virg.* 13.
- 79) *Anth. Pal.* 6.271. 前 3 世紀の作。272, 273 も類似の内容を伝える。
- 80) 銘文の各所に見られる ῥακος「襤褸、端切れ」という語の意味については議論があるが、月経や出産時の血が付いた衣類ではないかとする説もある。Osborne (1985): 249, n. 9.
- 81) 栗原麻子は、女性が親族以外の男性に顔を見られたり、噂に上ったりすることは好ましくないとされていたこの時期のアテナイにおいて、女性の個人名が社会のなかで情報としての価値を持たなかったことを指摘している。栗原麻子 (2010) 「前 4 世紀アテナイにおける通婚禁止令とアポロロス弁論の女たち」『西洋古代史研究』10, 41-42 頁。
- 82) 2 体あるいは 3 体のアルテミス像と考えられている。Larson (2007): 108.
- 83) Dillon (2002): 21f.
- 84) Dillon (2002): 23-25.

- 85) Dillon (2002): 21f. またオズボーンは、プロソボグラフィ研究により何人かの女性が実際に富裕な家庭の出身であったことを明らかにしている。Osborne (1985): 158-60.
- 86) Papadimitriou (1963): 113.
- 87) Linders (1972): 72.
- 88) ブラウロニア祭に男性の観客がいたか否かについても議論があるが、筆者は男性もいたであろうと考える。Ar. *Pax* 871-77 では、男性たちがブラウロンの祭りへ出かける道中のことを話題にしている。またアルテミス神殿の北側にある巨大なストアは、当初はアルクトイの宿舎であったと考えられていたが、現在では男性用の食堂であったと考えられている。Parker (2005): 230.
- 89) 桜井 (2010), 130-32 頁。
- 90) 聖域からアルテミスへの奉納物と考えられる幼い子供の小像が多数出土していることからわかるように、アルテミスは子供や若者を見守る女神でもある。そのためアルクテイア以前に全く女神との関係が無かったと言うことは当然できない。しかし、子供から大人の女性（妻・母）という新しい社会的身分に移行し、自身の意志で積極的に女神と関わり始めるという意味では、アルクテイアをもって女神との新しい関係を築き始めると考えることができるだろう。
- 91) Kahil (1977): 89f.
- 92) Ar. *Lys.* 638-53 からは、かつてアルクトスなどの宗教的役目を務めた女性が、その名誉を理由に都市に忠告する、という内容が読み取れる。ただし奉納に関しては目録に奉納者自身の名しか記録されていない例が多いため、非市民の女性が奉納していた可能性も十分に考えられる。
- 93) ブラウロンの聖域の視察と修復を定めた前 3 世紀頃の碑文が見つかっている。Papadimitriou (1963): 120; Parker (2005): 229.
- 94) 乙女の踊りを伴うアルテミスへの儀礼行動は、オリュンピア、スパルタ、シュラクサ、デロス、レスボス、エフェソスなどでも知られている。Lloyd-Jones (1983): 91. さらにテッサリアのヘレニズム時代の碑文には、若い娘がアルテミスに「シカとして奉仕した」ことが記されており、アルクテイアと非常によく似た儀礼が行われていたことが窺える。Faraone (2003): 58. 『オデュッセイア』に登場する王女ナウシカアとその仲間の娘たちも、アルテミスへの乙女の儀礼の存在を暗示しているとマリナトスは推測する。Marinatos (2002): 34. 女性によるアルテミスへの奉納等の例としては、前 650 年頃ナクソスのニカンドレがデロス島のアルテミスの聖域に奉納したコレ像が知られている。Dillon (2002): 9-11. 前 4 世紀のキュレネの聖法 (SEG IX, 72) には、新婦がアルテミスに対してペナルティを支払うことが記されている。Perlman (1989): 128f.

《English Summary》

A Reconsideration of the Maturation Rite for Girls in Classical Athens: The Functions of the 'Arkteia' and Dedication to Artemis in Brauron

Maho OYAMADA

In classical Athens unmarried girls, like adults and boys, also took part in some honorable rituals. This article focuses on the 'Arkteia', which was performed by girls in Brauron, one of the sanctuaries of Artemis in Attica. Most scholars have regarded the Arkteia as a ritual for girls entering maturity. However, some scholars have challenged this view, citing some contradictory literary sources. This paper shows that this ritual was not only a maturation rite in which young women participated, but that it also encouraged them to adapt to their future life as Athenian women.

Firstly, this paper reexamines whether or not the Arkteia was a maturation rite, and reconsiders its age qualification. Literary sources attest that the girls who participated in the ritual wore 'krokotoi' (saffron robes) indicating that they were sexually mature women. The legend of Iphigeneia, who is associated with Brauron, also alludes to this ritual as marking the passage of young women into maturity. The Arkteia was therefore a maturation rite for girls, as previous scholarship has claimed. However, there is room for reconsidering the age qualification of 5-10 years, as this age group would have been ineligible for this particular type of ritual. Based on an investigation of various sources, this article suggests that this age qualification is not reliable.

Secondly, this paper investigates the relationship between the Arkteia and the dedication performed by women for Artemis in Brauron. Women worshipped Artemis because she took care of mothers, childbirth and children. Many adult women dedicated expensive items to Artemis in Brauron, in expectation of her protection in gynecopathy or in childbirth, and her protection of their children. It seems that the girls who served as 'arktoi' (participants in the Arkteia) and the women who dedicated goods to Artemis were of an equivalent economic class. This means that the arktoi offered items to Artemis after they had reached maturity. The

treasure records of Artemis Brauronia (an epigraphic source) indicate that most of the votive offerings were items of clothing and that some of these were exhibited in the temple of Artemis. In addition, an inventory was erected along the wall of the temple and on a large stoa in the sanctuary. These facts suggest that girls who participated in the Arkteia learned the ways of life of Athenian women by means of the many votive offerings and the lengthy inventory. It is worth noting that some of the clothes displayed in the temple reminded the girls of important work; weaving. This would have been how the girls were transformed into the 'Athenian women' that Athenian society, specifically Athenian men, demanded.